

2020年12月20日 説教「博士達の求めと救い主」

マタイの福音書2章1～12節

キリストの誕生の次第における東方の博士達の到来の記事から学びます。

1. 博士たちはヘロデを訪問し (1～3節)

①東方の博士達 (1)「イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」ヘロデ王は一般的にはヘロデ大王と言われます。治世期間は紀元前37年から紀元4年頃です。当時ユダヤはローマ帝国の属国で、王を立ててその地方を治めることを許されていました。ローマ帝国としては、パレスチナ全体を統括する地方総督を地中海沿いのカイザリヤに置いていました。そんな頃、ベツレヘムの町で、イエスは生まれたのです。さて、ここに「東方から博士達がエルサレムにやって来た」とあります。東方とは、バビロニア地方であったと考えられます。砂漠などの行程を経て、やって来たのです。博士達とありますが、新共同訳聖書は「占星術の学者達」と訳しています。彼らが導かれて、やって来たのは都エルサレムでした。

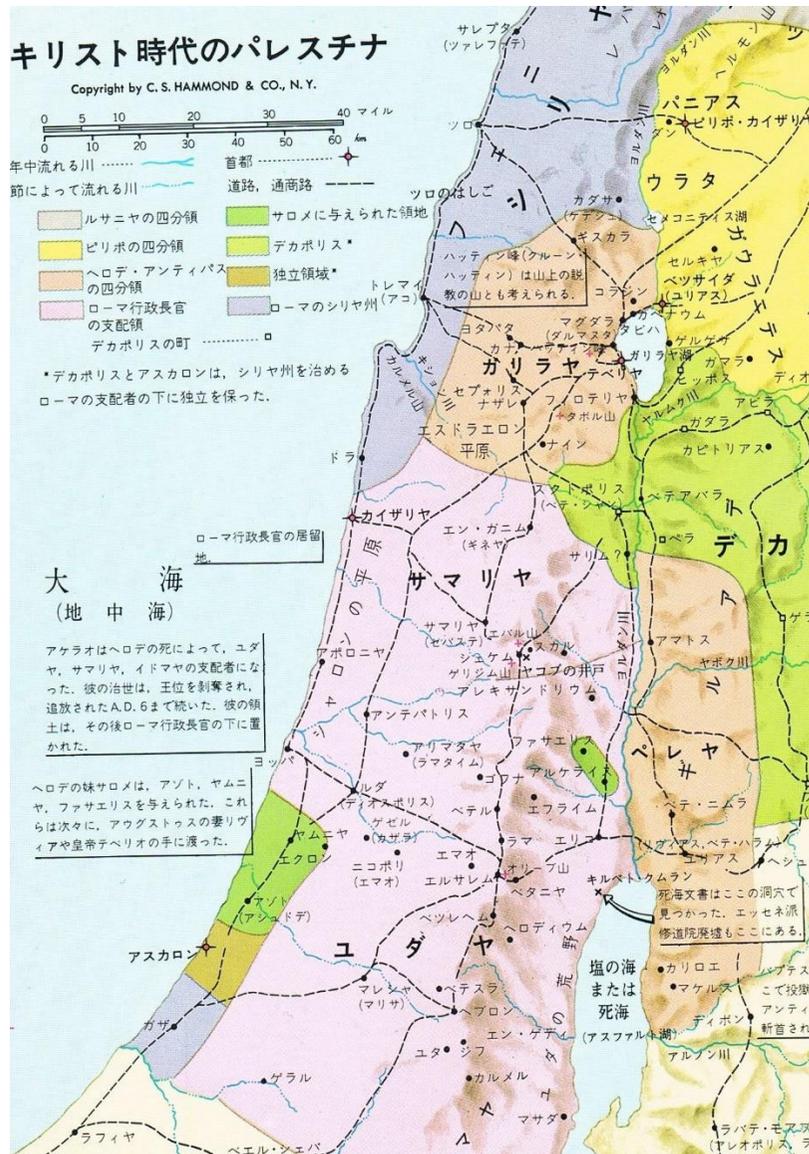
②星を見たので (2)『ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。』博士たちは、ユダヤの王を訪ね、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」と尋ねたのです。彼らは星のことを調べる専門家であり、不思議な星を見て、ユダヤに王が生まれたことを察知したのです。彼らはその子が、極めて高貴な方であることを認めて礼拝に来たのです。

③恐れ惑い (3)「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった。」ところが、この話を聞いたヘロデ王は心穏やかではありませんでした。自らの王位を揺るがすような存在が、生まれたと聞けば、放っておくわけにはいきません。その情報は庶民の心の中にも不安が生まれました。世が不安定になるのではという不安でしょうか。

2. ベツレヘムで生まれる方 (4～6節)

①学者たちを集め (4)「そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかを問いただした。」ヘロデ王は博士達から、その王とはキリストであると確認したようです。キリストとは油注がれた者という意味で、救い主のことです。そこで、王はキリストの誕生について情報を集めるため、宗教家や学者達を集めて、キリストがどこで生まれるのかを調べさせたのです。

②ベツレヘム (5)「彼らは王に言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。』」ベツレヘムはエルサレムか



ら南へ8キロほどの山あいの町です。旧約聖書の預言書にキリストがベツレヘムで生まれるとあることを、学者達は伝えました。

- ③決して小さくはない (6) 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』それは小預言書の中のミカ書 5 章 2 節にある言葉です。ベツレヘムは創世記の時代にもあった古い町ですが、預言書が記された時代には、あまり目立つ町ではなかったようです。ところが、そのベツレヘムから、力ある方が生まれるという預言が示されていたのです。

3. 幼子に出会った博士たち (7~12 節)

- ①へロデの策略 (7~8) 「そこで、へロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。そして、こう言って、彼らをベツレヘムに送った。『行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。』」これを聞いて、へロデ王は博士たちから、星の出現の時間を聞き出し、ベツレヘムに送り出したのです。その時に、博士達に伝えた言葉はこうでした。誕生したという幼子についての情報を教えてもらいたい。自分もその子を礼拝することにするからというものでした。王は、それがわかれば礼拝するどころか、抹殺するためにその所在を確かめようとしたのです。
- ②星の先導 (9~10) 「彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。」博士たちは王の依頼を聞いた後に出かけました。彼らには導きの星がありました。東方の地から彼らが追いかけてきた星が彼らを先導したのです。その星はエルサレムからベツレヘムまでの道、そして幼子がいる場所まで、ピンポイントで導いてくれたのです。博士達は長い旅路の末に、目的地にたどり着いたことを、とても喜んだのです。彼らには星が導いて下さったということは真実でした。
- ③幼子を礼拝し (11~12) 「そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。それから、夢でへロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へ帰って行った。」着いた所は一軒の家で、そこに母マリヤに抱かれる幼子がいたのです。彼らはひれ伏して拝み、道中携えてきた宝物を差し出したのです。黄金と貴重な香りの樹脂である乳香、これも樹脂で高価な薬である没薬が贈り物でした。ここに、差し出された宝物が三つであったことから、博士達は三人であったのではないかと言われます。彼らは救い主の誕生の恵みをいただいた後に、帰り路に着きました。但し、主の導きを得て、へロデのいるエルサレムには寄らずに真っ直ぐに東方の自国へと帰って行ったのです。

《結論》

東方の博士達がユダヤ人から見れば異邦人であることは確かなことです。そんな彼らが、どうして遠路の旅をも辞さずにユダヤの地にまでやって来たのでしょうか。彼らは星に導かれてやってきたのですから、ある面では、あのアブラハムのように、得も言えない促しに従って進んだのでしょうか。もちろん、博士達はミカ書 5:2 にあるベツレヘムのことについては知っていたと考えられますが、一步一步を導きに従いながら、目的の地に向かったのです。

彼らは向かう先に素晴らしい方がいらっしゃることを信じていたのです。人にはすべからく抱えている問題や課題があります。今年、創世記で学んできた、ヤコブにとっては、北の地に逃れつつも、20年間ずっと通奏低音のように、双子の兄エサウを欺いてきたという辛さが響いていました。ヤコブの子どものヨセフは、兄弟達に売られてエジプトにやって来て、奴隷として働き、やがては宰相の立場にまでなりましたが、こちらも20年間は親とも兄弟とも隔絶した寂しい年月がありました。今ここにいる博士達も学者としての身分はありますが、その人生の現実には難しさが横たわっていたことでしょう。しかし、この方への希望は彼らの心の中に一条の光が射したのです。『ユダヤ人の王がお生まれになった』という表現を使っていますが、民族の違いなどを越えて、悩み多き人間に救いをもたらす、そのような王が誕生したということが示されていたのです。そうでなければ、命の危険をも顧みず、外国の地に向かって踏み出すようなことはしないでしょう。それも、贈り物としての、宝物を携えていたのですから、いかに本気であったかということがわかるでしょう。

博士たちは、真理を求めていたのです。まことの救い主をたずね求めていたのです。キリストを求める純粋な心というものを、ここに見るのです。よく言われることですが、クリスチャンはキリストを求めている時代、あるいはクリスチャンになったばかりの時代の純粋さを、時間の経過とともに、ともすると忘れがちだということです。神の恵みの広さ、キリストの救いの奥深さは、計り知れないものですが、すべてわかっているような気持になり、もう求めようとしなくなるのです。

その面では、クリスマスは、私たちがもう一度、信仰の原点に立たされる時でありましょう。神の前に出る時です。罪がいかに底知れぬほどに深くても、神の恵みによって、信じて悔い改めるならそれは赦され、救われていくのだということを知りたいのです。お生まれくださるキリストは私たち救いをもたらすために来てくださったのです。

博士たちは、キリストを求める求道者たちでした。また誕生したキリストをあがめる、最初の異邦人クリスチャンであったともいえましょう。私達も改めて、キリストを追い求めていきたいのです。新たに求めている方々も、神である方が地上においでくださったという出来事を知り

ましよう。そしてともに救い主のご降誕を喜ぶたいのです。